「共に創る森」というテーマを体現する植樹活動

北海道の林業を担う
人材の育成を支援する

森でつながる

人が
つながる

STORY 01

ほくでんグループ × 北海道立北の森づくり専門学院

ほくでん 北森カレッジ 共創の森

1951年の創立から70周年を迎えた2021年、新たな取組として「ほくでん北森カレッジ共創の森」をスタートさせたほくでんグループ。北海道の明日の林業を担う人材育成支援の観点から、北海道初の林業専修学校「北海道立北の森づくり専門学院」との共働によって新たな森を創生する活動を展開している。

「水源の森」を舞台に北海道の林業を担う若者たちとの共働を展開

石狩管内当別町と空知管内月形町にまたがる、約12,000haもの広大な森林「道民の森」。北海道では、この道民の森の神居尻地区にある牧野跡地を「水源の森」と名付けて森林づくりを進めており、この地での森づくり活動に取り組む企業を募集している。2021年、北海道電力では創立70周年を記念し、北海道と『ほっかいどう企業の森林づくり』に係る協定を締結してこの森林づくりに参加した。環境保全グループリーダーの尾本さんは『森林再生と水源かん養機能の維持回復や、生物多様性の保全への協力を通じて、北海道の社会問題の解決に寄与することを目指しています』と語る。さらに、北海道初の林業専修学校「北海道立北の森づくり専門学院（以下『北森カレッジ』）」と共に実施することが大きなポイントになっている。担当する植樹エリアも、ほくでんグループと北森カレッジの「共働」によって新たな森を「創生」するという思いを込めて「ほくでん 北森カレッジ 共創の森（以下『共創の森』）」と命名された。活動のパートナーに北森カレッジを選んだ背景には、人材不足が叫ばれている北海道の林業の後継者育成を支援するという目的があった。

社長、学院長も植樹に参加

樹種ごとにエリアを区切って植える「群状混植法」は混交林を育てるための植栽方法で、生物多様性の観点からも有益。この植樹スタイルも北森カレッジからの提案だ

生徒と社員による植樹活動がお互いの理解を深める場に

2022年10月6日、「共創の森」で植樹活動が行われ、北海道電力の藤井裕社長をはじめとするほくでんグループ社員が参加し、旭川から来た北森カレッジの1年生と合わせて約80名による作業となった。断続的に雨が降るあいにくの天気の中、参加者たちはミズナラやオヒョウなど6樹種1,000本以上の苗木を植えた。樹種や植栽方法についても、北森カレッジから専門的な知見に基づいた提案があったという。「SDGsや生物多様性などの見地から、生徒からの柔軟な発想を活かしたご提案をいただきました」と尾本さん。たとえばキハダは、ミヤマカラスアゲハが産卵し、ハチミツの原料になるといった生物多様性の観点と、アイヌ文化における食用、薬用、生活用品としても重要である点から選定されたものだ。初年度はコロナ禍により、北森カレッジの生徒や社員の参加が中止となって事務局主体での植樹だったため、ここからが「共創の森」の本格的なスタートと呼べるかもしれない。社員と生徒が一堂に会する機会として、この日の午後からは林業と環境保全に関する勉強会が行われた。ほくでんグループ社員と北森カレッジの生徒が双方の活動に関するプレゼンテーションを行い、意見交換を行う中でお互いの理解を深める場となった。

「ほくでんグループの環境に関する取組」「北森カレッジで半年間学んで感じたこと」というテーマのプレゼンテーションで、「共創の森」を一緒に育む意識を高めた。

事業の持続的な発展と持続可能な社会の実現を両立

「共創の森」は、ほくでんグループの社員にとってもSDGsや生物多様性、カーボンニュートラルなど、社会的課題を身近なものとして実感するためのフィールドになった。植樹活動自体は以前から展開されており、全道130カ所で200万本を超える植樹が行われてきたが、尾本さんは「これまでは木を植えること自体に大きな目的を感じていたのですが、これからは社会課題の解決をより意識した活動を考えています」と語る。「木を植える＝環境に良い」というシンプルな思考から発展し、健全な森を再生させることによって、さまざまな森林機能の回復や自然文化の保全などについて社員が考える機会にしようと考えているのだ。この取組で特に重視しているのが、森を介した人材の育成である。「共創の森」での植樹活動や林業関係の専門図書の寄贈など、未来の森づくりを担う人材を育てる北森カレッジとの共働は、ほくでんグループの将来を支える社員の成長にもつながっている。「目指しているのは、将来に向けた事業の持続的な発展と、持続可能な社会の実現の両立です」。「共創の森」の名前にもなっている「共創」は、北海道の人々と共に新たな価値を創り上げるというほくでんグループのビジョンだ。人と人が共に創る北海道の明日は、文字通り明るい日々となることだろう。

北海道電力株式会社
環境室 環境保全グループリーダー
尾本 直隆さん

きっかけ

2021年に参画した「道民の森」の森林づくりにあたり、人材育成支援の観点から、北海道初の林業専修学校との共働によって新たな森を創生する活動を開始。

行動

「共創の森」での植樹では、樹種や植栽方法についても北森カレッジから専門的なアドバイスを受けるなど、生物多様性や環境保全への視点を重視して展開。

ビジョン

人材育成の観点から、北森カレッジとの共働をほくでんグループ社員の成長にもつなげ、事業の持続的な発展と持続可能な社会の実現の両立をめざす。

馬を使って木を運ぶ馬搬

生まれた人の輪を
未来に引き継ぐ森林活用

森でつながる

人が
つながる

STORY 02

株式会社苫東 × 地域コミュニティ

苫東・和みの森（とまとう・なごみのもり）

日本最大の工業基地として知られる苫東には、19haもの面積を有する「苫東・和みの森」がある。企業に求められる環境保全活動の実現はもちろんのこと、安らぎや癒しのある森林空間という場所を提供することで、森を介した人々のつながりが未来に引き継がれる森づくりに活かされる取組が行われている。

日本最大の工業基地が全国植樹祭の開催地になった

苫東は、苫小牧市・厚真町・安平町の1市2町にまたがる日本最大の工業基地である。総面積は10,700haと、東京の山手線内側の1.7倍に相当する広大さを誇り、100社以上の企業・団体が立地している。「苫東・和みの森」は、苫東のほぼ中心にある19haの森林地帯だ。2007年に行われた「第58回全国植樹祭」の開催地であり、その跡地と周辺の森林が、人々の出会いや交流の場、森づくり活動の場として利活用されている。「植樹祭にこのような工業地域が選ばれるのは画期的なことで、全国的にも注目されました」と語るのは、苫東の開発や管理を担う株式会社苫東の辻社長だ。さらに2021年10月には、コロナ禍ではあったが『第44回全国育樹祭』が『苫東・和みの森』で開催された。『森林保全活動ではどうしても植樹が注目されがちですが、実は植えた後の育樹が大事です。枝打ちや剪定をしないと木は生長できませんし、森もそれと同じで、間伐をしないと全体がダメになってしまいます」という言葉の通り、森の育て方や手入れの大切さも辻社長が伝えたいポイントであり、そこに企業が参加できるような仕組みも考えているという。

「苫東・和みの森」での木育活動

「月に一度は森づくり」では、薪割りや火おこし、料理にも挑戦するなど、木や森とのつながりを体験し、子どもから大人までそれぞれが楽しめる場を提供している。

運営協議会形式の展開でより多くの人々が森と関わる機会を増やす

「苫東・和みの森」の敷地は株式会社苫東の所有だが、その運営は、北海道、苫小牧市をはじめとした企業・団体や個人で構成される「苫東・和みの森運営協議会」が担当し、そのメンバーにはもちろん株式会社苫東も入っている。2009年から活動を続けている協議会の目的は、この場所をだれもが気軽にやって来て親しめる「森のコミュニティセンター（コミもり）」にすること。「森という、人々にとって安らぎや癒しのある場を提供していくというのが我々の役割で、それが『和みの森』という名前にもなっています」と辻社長。「苫東・和みの森」では年間を通じて、子どもだけではなく大人も対象にした木育イベント「月に一度は森づくり！」を開催している。森林内の倒木などを馬で森林外に出し（馬搬）、それを伐って薪づくりをしたり、集めた枯れ木を燃やしてお茶を淹れたり、車イスでも森の散策ができる木道を作ったり、参加者は自分たちのペースで森づくりや森遊びを楽しんでいる。「実際に森を体験できるこのような利用機会をどんどん作っていきたいですね」。また、森の大切さを写真で表現する人も増えており、苫東がテーマのフォトコンテストには毎年多くの応募がある。さまざまな形で森と関わりたいという人々のニーズにどう対応していくか、それも今後の課題である。

日常生活では出会うことのない人同士が協働し、会話を交わして友達になって、また楽しく集まれる。「苫東・和みの森」をそんな場所にするための活動が続けられている。

市民や立地企業も巻き込みながら進める未来につながる森づくり

辻社長は、「苫東・和みの森」を含む苫東エリア全体を「可能性の森」と考えている。工業基地の中に広大な緑地があるということは、産業活動と環境保全活動が両立しやすいということである。世界的に脱炭素社会に向けた動きが求められる中、環境問題への取組が必須となっている企業にとって苫東への立地は大きなアドバンテージになる。「企業の社会貢献としても、森林資源のすぐそばで企業活動が行えるという利点はさらに重要になってくると思います。しかしもっと大事なのは、立地企業の方やそのご家族に、緑という癒しの空間を提供できるということです」。森林浴の癒し効果は科学的にも証明されているが、仕事や家事で忙しい毎日の中でふと自然に触れることで疲労がリセットされ、心身ともにリフレッシュできる、そんな場所が身近にあるメリットは大きい。「そのためにも、さまざまなイベントなどの機会を通して、もっと大勢の方に『苫東・和みの森』を訪れていただきたいですね。森が人と人とのつながりの中心部にあることで、樹々を大切に育てて守るという心の輪が広がっていくと思います」と語る辻社長。森は植林から伐採までのサイクルが非常に長い。たくさんの人に関わってもらいながら、未来に引き継がれる森づくりはこれからも進み続ける。

株式会社苫東
代表取締役社長
辻 泰弘さん

きっかけ
2007年に行われた「第58回全国植樹祭」の開催跡地と周辺の森林を、人々の交流の場や森づくり活動の場として利活用するために「苫東・和みの森」がスタート。

→ **行動**
実際の運営にあたって『苫東・和みの森運営協議会』を組織し、木育イベント「月に一度は森づくり！」をはじめ、人々が森に親しむ活動の場を提供している。

→ **ビジョン**
産業活動と環境保全活動の両立という利点を活かしながら、「苫東・和みの森」を未来につなげるため、より多くの人々が森づくりに参加できる仕組みを構築していきたい。

森を楽しむ人を増やすことで森林管理を地域貢献に

ノコギリを使って丸太を切る体験も、森を知るための大切なプロセス。『マテリアルの森』では、これらの間伐木や間伐材を使ったグッズ等も製作している。

森でつながる
人がつながる
STORY 03

三菱マテリアル × 森林教育

マテリアルの森

大手非鉄金属メーカーの三菱マテリアルは、国内有数の大規模森林所有者でもある。「マテリアルの森」と名づけた社有林は、適切な森林管理を行うとともに、地域の人々のレクリエーションの場としても提供されている。

地域に愛される場所として自社所有の森林を活用

三菱マテリアルでは、北海道を中心に全国で1.4万haもの森林を保有している。もともとは自社の鉱山として、また炭鉱の坑道を支える坑木供給のために保有していた森林である。国内に鉱山や炭鉱がなくなったことから役割を大きく変え、現在では全国に31カ所、北海道には11カ所の「マテリアルの森」として、きめ細かな森林管理がなされている。森林管理室長の叶内さんは、同社の「人と社会と地球のために」という企業理念がその根底にあると言う。「生産される木材の有効利用を始め、森林には地域の方々に愛される場所としての機能もあると思いますので、その空間をもっと活用しながら地域に貢献していきたいと考えています」。たとえば、2018年の北海道胆振東部地震の復興支援をきっかけに、「マテリアルの森」の早来山林で育ったアカエゾマツの木で製作したクリスマスツリーを毎年厚真町の保育園に寄贈している。「ほんの小さな活動かもしれませんが、このツリーに触れた子どもたちに、森や木への愛着が育まれてほしいですね」と叶内さんは思いを語る。

たくさんの人が集まる森は自然な木育の場にもなる

都市近郊の『マテリアルの森』は、その一部が地域住民に開放されている。たとえば札幌市の手稲山林は、市民の森、自然歩道、青少年キャンプ場などの役割のほか、近郊の保育園の園児たちが自然と触れ合う場にもなっている。卒園する園児には、森の木を使った『木の卒園証書』が贈られる。「あとで見たときに、森でいっぱい遊んだことを思い出してくれれば」と語る叶内さん。たくさんの人が集う森から、木育の輪が広がっている。

三菱マテリアル株式会社
プロフェッショナルCoE 環境保全センター森林管理室
森林管理室長　叶内 元章さん

さっかけ　「人と社会と地球のために」という企業理念に沿って、広大な社有林を地域に愛される場所「マテリアルの森」として展開した。

行動　「マテリアルの森」の木で製作したクリスマスツリーや木の卒園証書を保育園に寄贈するなど、子どもたちへの木育も積極的に進めた。

ビジョン　会社の資産であり、その地域を形成する重要な環境要素のひとつでもある「マテリアルの森」をさらに活用しながら地域に貢献していきたい。

地域社会と深く関わる活動を人々のアクションのきっかけに

身近な自然に目を向ける活動の一環として、各学校オリジナルの「学校の木のしおり」と「ニッセイの森」の間伐材を活用した「樹木名プレート」を寄贈しています。ニッセイ緑の財団ホームページよりお申込みください。

森でつながる
人がつながる
STORY 04

ニッセイ緑の財団 × 全国の小中学校

ニッセイにっしんの森

森林資源の保全と再生に取り組む、ニッセイ緑の財団の「ニッセイの森」。200カ所目となった森町の「ニッセイにっしんの森」では、植樹・育樹や森林を愛する心の醸成など、地域社会との協働による活動を展開している。

森町との深い関係性のもとで植樹・育樹活動を展開

業務で大量の紙を消費することから、以前より森林資源の保全と再生に取り組んできた日本生命保険相互会社（以下『ニッセイ』）。1993年に設立された「ニッセイ緑の財団」は、水源かん養機能を重視した森林づくり事業を全国で展開している。設立時の目標だった100万本の植樹計画は2002年に達成し、2020年7月には「ニッセイの森」200カ所を達成した。記念すべき200カ所目が森町の「ニッセイにっしんの森」である。同財団の助川さんが「日本生命の日（につ）と森町の森（しん）を合わせた名前を町からご提案いただきました」と由来を語るように、森町との深い関係性のもとで植樹・育樹活動が展開されている。「職員がボランティアに参加しやすい環境で、社内全体のSDGs意識を高めるとともに、地域の皆さまとのつながりを生むきっかけにもなりました」。さらに、財団の活動のもう一つの柱「森林（もり）を愛する人づくり」においても、親子工作体験イベントや、間伐材を加工した「樹木名プレート」や「学校の木のしおり」を小中学校へ寄贈する木育活動等にも積極的に取り組む考えだ。

ニッセイの森での取り組みを人々の行動につなげたい

長期的な視点と継続性が不可欠な森づくりでは、十数年ぶりに参加したボランティアが当時植えた苗木の成長に驚く姿もよく目にするという。生命保険の特性である助け合いの精神と、持続可能な未来につながる活動は親和性が高い。『ニッセイの森をはじめとする私たちの活動が、お客さまや地元の皆さまが行動するきっかけになれたらうれしいです」という助川さんの言葉通り、地域社会との関係が取組の成功の鍵を握っている。

公益財団法人 ニッセイ緑の財団
企画事業部 担当課長　助川 啓太さん

さっかけ　1993年に「ニッセイ緑の財団」を設立して、100万本の植樹をはじめ、水源かん養機能を重視した森林づくり事業を全国で展開。

行動　2020年7月に始まった森町の「ニッセイにっしんの森」で、同町との深い関係性のもとで植樹・育樹などの活動に取り組んでいる。

ビジョン　森づくりや「森林（もり）を愛する人づくり」などの取組を、顧客や地域の人々がアクションを起こすきっかけにしていきたい。